

平成 27 年 10 月 4 日

## ケニア医療ボランティア活動レポート

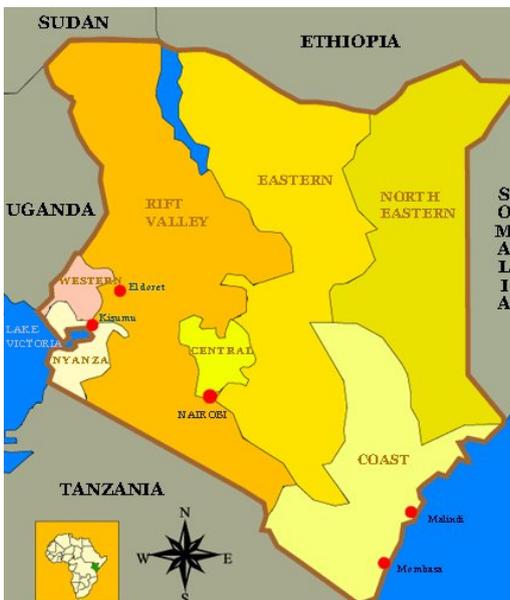
一般社団法人 愛知県鍼灸師会会員  
坂光 信夫

今年も 9 月 11 日(金)から 22 日(火)までケニアに行き、農村での医療ボランティア活動に参加して参りました。この活動は私が理事を務めている NPO 法人アフリカ支援 アサンテ ナゴヤの主催によるもので、農村での医療活動は今年で 6 回目、私個人としては一昨年、昨年に引き続き 3 年連続 4 回目となります。日本人参加者は全部で 18 名で、受付 1 名、内科医 4 名、小児科医 2 名、皮膚科医 1 名、採血 2 名、検査 3 名、薬局 3 名、そして鍼灸師は千葉からご参加下さった中野朋儀先生と私の 2 名でした。

私たちが活動しているゲム・イースト村はニャンザ州というケニア国内でも最も HIV 感染率の高い地域にあります。首都ナイロビから西に 300 キロほど離れている僻地の農村です。

ケニアの首都ナイロビは東アフリカの中心都市で、南部中央に位置します。東にずっと行くとインド洋、西に行くとヴィクトリア湖があります。ニャンザ州はヴィクトリア湖に面したエリアですが、ゲム・イースト村は数十キロ内陸に入ったところにあります。

ケニアは赤道直下ですが、ナイロビもゲム村も標高が高いため、意外に暑くありません。朝晩は気温が下がるのでセーターなどが必要なほどです。夏の暑さについては湿度の高い名古屋の方が厳しいかもしれませんね。



私がキャンプに参加するきっかけとなったのは愛知県鍼灸師会のメーリングリストです。会員の石川佳子先生が 2011 年のキャンプに参加する鍼灸師を応募されたのです。石川先生はアフリカ支援 アサンテ ナゴヤの理事長を務めてらっしゃいます。帰国後、私も理事となり、それ以来活動に参加しています。

アサンテ ナゴヤとしてこれまで 6 回キャンプを実施し、最初の年は石川先生がお 1 人で鍼灸を担当されましたが、翌 2011 年からは毎年 2 名の鍼灸師が参加しています。これまで石川先生と私以外に 3 名の方にご参加頂いています。私たちは小さな団体ですので、ケニアまでの航空券代と滞在費の一

部に相当する金額を皆様にご負担して頂いています。もちろん石川先生や私も同様です。お仕事を長期間お休みし、金銭的な出費も伴いますので、キャンプへの参加は簡単なことではありません。現地での活動は過酷で体力を消耗します。気候や食事の違いから体調を崩される方もあります。それでも毎年皆様が参加申し込みを下さるのは、やはりアフリカという異国で鍼灸をすることの魅力なのでしょう。



私自身は今回で 4 回目の参加となり、「なぜ毎年ケニアに行くのだろうか？」と自問することがないわけではありませんが、実際には鍼灸師としてよりも理事として運営に関わっているからという方が大きな動機付けになっています。

実際、キャンプでの活動よりも準備の方が大変です。ケニアの入国ビザはナイロビの空港で取得していたのですが、出発直前に急にシステムが変わり、今後はすべてオンラインでビザを取得しなくてはならないということになりました。ネットに不慣れな参加者もいる中、全員がビザを取れるよう手配いたしました。

ニャンザ州でのプロジェクトは、現地のチャリティ団体 **RUNELD** と協力して進めています。医療キャンプの実施についても、**RUNELD** が受け入れ団体としての役割を果たしています。

アサンテ ナゴヤは 2013 年から募金を実施し、翌年コミュニティセンターを建設しました。昨年は井戸掘削募金を行い、村の人たちにはクリーンな水が提供できる体制を調えつつあります。私の理事としての役割にケニアのルーネルドとの連絡があります。ケニア滞在中は **RUNELD** の理事ダグラスさんとホテルも同室にして、話し合いをしています。ダグラスさんとはこの数年来、年に一度会う親友のような関係になりました。ケニア人とこのような友情を育む機会が得られるとは思っても寄らないことでした。



鍼灸治療に関しては、今年は 4 日半で 246 名に診療を施しました。ベッド代わりにの台を 2 台と椅子 3 脚を駆使しての施術はかなりハードでした。特に 3 日目と 4 日目は 70 人近くの患者が押し寄せ、いつになったら終わりになるのか不安になるほどでした。



有体に申し上げて、村の人たちへの治療には手ごたえはありません。問診はボランティアの通訳を介して行います。現地のルオー語を英語に通訳してもらいますが、身体の痛み等に関する表現を外国語でやり取りするのはかなり困難です。触診をして、痛む場所を確認し、現地語の挨拶や「痛い」「ここ」「そこ」「力を抜いて」な

どの簡単な言葉を覚えてコミュニケーションを図るのですが、村の人たちは「イエス」でも「ノー」でも「フン」と頷くだけです。治療が終わって「ありがとう」の一言があったのは5日間で1人だけ。現地語で「さようなら」と言うと、口の端に笑みを浮かべる人が何人かいました。このような状態で、私たちが行っている鍼灸治療が現地でどのように受け入れられているのか全くわかりませんでした。何でもいいからとにかく無料でやってもらえるなら、ということで来ているだけなのではないかという気にもなりました。

年度	患者数
2012年	124
2013年	72
2014年	179
2015年	246

でも今年このようにたくさんの人に治療をして、少なくとも身体の痛みに関しては一定の評価を受けているらしいということがわかりました。毎年治療を続けて来て「アキュパンクチャーをすると身体が楽になる」という評判を呼び、多くの人が鍼灸治療を受けることを希望されたのです。受付を担当したボランティアが自分たちの身内に勝手にカルテを発行してしまい、そのせいで私たちが想定していた人数以上の患者が来る結果となりました。これはキャンプの後で現地の人たちと話をしたことでわかったことです。村の人たちが無愛想なのは、肌の白い外国人を前にして緊張していただけだったのかもしれない。

村の女性たちは日ごろ重労働に従事しています。彼女たちがアフリカ式に頭の上に重い荷物を載せて、長い距離を歩いているのを私たちはバスから目にします。水道のない村では、毎日何度も水を運ばなくてはならないのです。男性はそのようなことはしません。もしかしたら重い荷物を運ぶのは女性の役割と決まっているのかもしれない。ケニアの村でも女性差別は深刻な問題なのです。

鍼灸治療を受けに来た患者の8割が女性で、小さな子ども以外の全員がそうした肉体労働に従事していると思われました。それは背中中の筋肉を触ればすぐにわかりました。そのほぼ全員が腰痛と頸痛を訴えました。痛みを訴える場所は同じで、日々の過酷な労働が原因であることが明らかに察せられました。私たちの鍼灸治療は年に1回のことでしかありませんが、それでも身体が楽になると言うことで、出かけて来てくれたのだと思います。

アサンテ ナゴヤは小さなNPOで、活動基盤がそれほど安定しているわけでもありません。今後いつまで活動を続けていけるかわかりませんが、遠いアフリカとのご縁を大切に、今後とも活動を続けていくつもりです。



アフリカ支援 アサンテ ナゴヤの活動にご興味のある方は以下のリンク先をご覧ください。

アフリカ支援 アサンテ ナゴヤ ホームページ <http://asante-nagoya.com/>

アフリカ支援 アサンテ ナゴヤ facebook ページ <https://www.facebook.com/asante.nagoya>